

ふるさと、風

第91号 (2013年12月)

風に吹かれて (69)

白井啓治

『秋深し人の心の哀れを隠す葉かげもなく』

後出しジャンケンくらい人間の持つ姑息さを端的に示す行動はないだろう。昔の私であれば、後出しジャンケンを目にしたら即張り倒していたのであるが、今は古希の翁イーなのでそんな元気はない。しかし、後出しジャンケンを許せぬ、いや許さぬ感覚は若い頃よりも強いものがある。

こういう話は、特に政治家達には耳をかつ掘って聞いてもらいたのであるが、後出しジャンケンのな我欲、行動が身に着いてしまっていて既に聞く耳などは持っていないのかも知れない。

秘密保護法だって、数の力を持ったことによる後出しジャンケンのようなものだ。原発問題もそうだ。大体において、選挙政治というのは選挙前に選挙民にその政治構想を明確に伝えておかなければならないのであるが、大勝した選挙後に次々と決定していくものは、後出しジャンケンの政策ばかりである。選挙前の絵に描いた餅はあくまで絵なのである。

政治家は勿論のこと選挙民も後出しジャンケンに麻痺してしまって、勝てば官軍、後出しのどこが悪い、の感覚が蔓延しているといえる。お蔭で、

昔は倫理として後出しジャンケンは恥ずべきことと教えられ、その通りであると皆が認識出来ていたのであるが、悲しいかな今では日常の生活にも反倫理とはなっていないようである。

後出しジャンケンとは我欲が繰り出す最も幼稚で姑息・卑猥な行為であろう。我欲とは、他人に構わず自己の利益のみを欲する欲望のことを言うが、人間固有の根源的欲求という事が出来る。あの意味、人間固有の我欲を持つことで今日的便利の進化があつたといえる。しかし、成熟した人間社会では、我欲ほど醜いものはない。

最もあつてはならない文化芸術表現の世界でも我欲出しの利権構造が報じられた。あまりにも恥ずかしすぎる内容である。小生も新人賞の選考に係った事があるが、我欲をもつて尺度した事はない。勿論後出しジャンケ的な幼稚な姑息を思つた事もない。選者の全員、才能あふれる新人の発掘に努めた事は言うまでもない。

つい最近のことである。この歳になって後出しジャンケンを自分自身に向けられるとは思ひもよらなかつたが、そんな現実には遭遇した。人間の姑息・卑猥な言動には若い頃以上に許せぬものがあるが、それを当人に指摘し言う事はしなかつた。許せぬ感覚と同時にこの年令に達すると、希望の持てぬ人に対して希望の話をする事の無意味さが

よくわかる様になってくる。

何かの意見をすると言うのは、それを受け止める側に受け止める素地があるから意見をするのであるが、受け止める素地のない者に何を言っても疲れるだけ。説得だとか意見をすると言うのは、受け止める能力のある者へのみ行うもので、受け止める能力のない者に対しての意見・説得は馬の耳に念仏よりも虚しくなるものである。

2013年も今月で終り、2014年を迎えることとなる。来年は、少しでもいいから今年よりも夢や希望を紡げる年にしたいものである。しかし、今年が悪かつたとは全く思っていない。今年もそれなりに夢や希望を紡いできた年であつたと思う。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談・勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

⑤ 平和ボケ

世界中で現在、日本みたいに平和ボケしている国が他にあるだろうか？

永世中立国のスイスは、20〜42歳の男性には徴兵義務があり、15週間の基礎訓練受講後は自宅待機状態で、常備軍は持たない。但し緊急事態が発生すれば、48時間以内に召集される国軍は40万人と言われる。他に民間防衛隊³²万人もいる。永世中立国とは言え、国の備えは万全のようだ。

スイスは、国連にも加盟しない徹底した中立主義であったが、EUがらみもあり、2002年9月、第190番目の加盟国になった。いくら中立を唱えても、他国が攻めてくれば、敢然と戦うほかあるまい。

さて我が国は、近隣の国々から見れば、6年間に総理大臣が6人も変わるような政治的に不安定な状態は、正に弱体化と見え、攻めるなら「ふだー」と映るに違いない。日本周辺は今、真に騒々しい。さりとして、すぐ軍備を拡張して、猛悪共を退治しろ！とは言わない。知恵を絞って、全世界が容認できる解決法があるはずだ。

私に言わせれば、全世界に、強力な「国連軍」が一つ有ればよろしい。たまに、ならず者が暴れ出したら、有無を言わずに国連軍が始末する。そうすれば国ごとに軍備保持・拡張などする必要はない。

我が国は自由だ！民主主義だ！と履き違えた勝手主義的振る舞いが多すぎる。国民は支持政党無しが四割強。国政選挙の投票率が、六割前後。こんな国民性は超無関心・超無責任・愛国心不足そ

のもの。平和ボケで、独立国の責任感が薄い。ハングリー精神も希薄。祖国のために勝利を！と期待する民族意識も薄れ、スポーツの国際大会でも、パツとしない。

国会は小規模政党政乱立で、足の引つ張り合い。やっと先の選挙で、衆参のねじれ現象が解消し、「決められる政治」が定着しつつあるが、他国が付け入る「隙」を与えない政治を、確立してもらいたい。

政治家よ、国政の舞台上に上りたいのなら、国家百年の計を念頭に、子孫に膨大な借金を残すなど論外だ。その時代に生きる人々は、その時代の人々で自己完結すべきだ！

今、日本はアメリカの核の傘にドツプリと浸り、何かあれば米国が守ってくれる…。それはあまりにも他人任せで甘すぎはしないか…。アメリカも借金が嵩み、いつでも債務不履行の危機に曝されている。自国が倒れそうな時に、まず他人を助けるのが先だ：などと、本腰で動いてくれるとは到底思われない。個人も国家も自分の事は自分で守る。大雨で崖崩れが必至だというのなら、行政が避難勧告を出そうが出すまいが、自分の命は自分で守るのが原則であろう。状況にもよるが、地震も津波も台風も、自助努力で動かなければ命は助からない。

それは災害対策だけではなく、万事、「天は自ら助ける者を助ける」。老いた親の年金で、働かずに50歳代の息子が生活している話など聞くが、一体今の日本は、どうなってるの？ 親の過保護のなれの果て？ 戦後、自分が辛酸をなめたから、せめて子供にはあの苦勞をさせたくはない：という親心が、そんな悲劇を生んだのではなからうか。子

供が可愛いかったら突き放せ！

生命の原則は、「代謝と増殖」だ。その大原則に従い、特別の場合を除いて、自分が食べるものは自分で採せ！自分のDNAのコピーをこの世に残したかったら、自分で繁殖相手を腕づくでも獲得しろ。野生の原則をしっかりと取り戻せ。誰かが御膳立てをしてくれるのを待つ：では事は進まぬ。自分の道は自分で切り開くほかないのだ！

「衛生と治安」の良さは、恐らく日本は世界一だろう。これは戦後日本が命がけで築いた宝だ。それを維持継続することは至難の業だ。若い者は、先輩が築いた至宝の上に胡坐をかき、ドツプリ・ノホホンでは、餓えたハイエナに命を狙われる！

日本は他国と陸続きでないだけに、比較的小競り合いは少なかつたかも知れない。陸続きなら、越境・密輸など国境線はいつも緊張状態が続くに違いない。平和とは、誰かが与えてくれるものではなく、普段から努力を重ね、自分で築くものだ。

⑥ どこで、ものを考えるのか？

又々つまらない事を言い出す：と怒りなさんな。考えるのは脳味噌だつべ：と一括されそうだが、なら脳味噌を持たない単細胞生物は、どこでもものを考えているのか？

2008年、米ハーバード大から「イグ・ノーベル賞」を受賞した北大の中垣教授は面白い実験を行った。それは平板の上に迷路を刻み、単細胞の真性粘菌をばらまき、平板の片隅に粘菌に必要なエサを置いたところ、なんと殆どの粘菌は、迷路を迷う事なく最短距離でエサに辿り着いたという。

さて、粘菌は単細胞である。勿論脳味噌も神経

細胞も存在しない。目や耳や足があるわけでもない。エサに最寄りの菌は、すぐ隣に移動してエサにありつけるとしても、迷路のはるか遠くの菌は、どうしてエサのありか・方角を感知し、試行錯誤ではなく、一直線にエサに直行できたのか？ 教授の感想は、エサに最寄りの菌が、恐らくなんらかの伝達物質を分泌し、隣の菌に「エサがあるぞ！」と知らせる。それが次々と同じ行動を繰り返して、はるか遠くの個体にまで伝達されたに違いない：ということだ。この恐るべき知力には、ただただ驚くばかりとのこと。人知の及ばぬ現象だ。

夏には「蚊」に刺されて酷い目にあつた。あんなチツポケな虫に刺され、痒いだけならまあ我慢するとしても、夜行性の「コガタアカイエカ」は、豚の体内で増殖した「日本脳炎ウイルス」を人間に媒介し、人を殺す。蚊帳を張ろうが、蚊取り線香を燃やそうが、とにかくどこかで人間の存在を感知し、幾多のバリアーをくぐりぬけ、秘かに人間の生き血を吸る。♂の蚊は吸血しないが♀の蚊は怖い。こうして何万年も種を絶やさず生き続けてきたのだ。動物が吐き出す炭酸ガスで動物の存在を知り、皮膚の下の血管を瞬間に感知し、ズバリ穿孔・吸血する。あんな奴に命取りのウイルスまで媒介されては、たまつたもんじやない。

植物だって、「意思」を持つ。熱帯のある種の「蘭」は、動物界で「伝達」に使われる「フェロモン様物質」を分泌し、風に流し、ある種の「蜂」の♂を引き寄せる。蘭は♀蜂にそっくりの花びらを持ち、♂蜂を引き寄せ、偽交尾をさせて、マンマと花粉を運搬させる。手の込んだ謀り事。人知も及ばぬ植物の計略には恐れ入る。

その他、植物の葉は虫に食われないよう毒素を

分泌し、根の周りに他の植物が生えないよう根から毒素を出して、己の「種」のみが生き延びようとする。

唐辛子は、あんなに赤くて辛いのは、色盲である多くの草食動物に、もし食われても、あの辛さに懲りて二度と食べなくなる。一方、色に敏感な鳥類なら、真っ赤な実をすぐ発見し、歯がないので、噛み砕かれもせず、辛味を感じる前に丸飲みだ。トウガラシはそのことをちゃんと知っている。遠くに種を運んでもらって子孫を繁栄させる作戦である。真に賢い。

チョコレート^①の原料になるカカオの実は硬くてかなり大きい。木は6メートルで幹は電柱くらい太くなる中南米原産。カカオの実は2.8cmくらいでその中にカカオ豆と呼ばれるタネがあり、脂肪・タンパク質共に20%の栄養に富み、マヤ文明では貨幣として流通した。さてそのカカオの実は、なんと地上1メートルの幹のど真ん中に、ドカンとなつている。その理由は、野生の豚の口が届く高さには実がなり、実を食われ、消化しない堅いカカオ豆を、遠くに運んでもらい、子孫を残す作戦なのだという。

人間だけが賢いと思つたら大間違い。トリカブト・毒キノコ。保護色や擬態。ヒバリは巢のある直下には舞い降りない。離れた所に降りて、歩いて我が巢に辿り着く。天敵に巢の在り処を知られない作戦である。

それにしても人類がフェロモン感知能力を失つたのは、なんとも残念。人類の祖先も野生時代は、密林の中など見通しは利かないので、フェロモンを分泌し、仲間と交信し合つていたと思われ。好きな彼女の臭いなど木の枝に残つていれば、シ

メシメと胸とどろかし、足も軽かつたろうに！

臭いは鼻で：が常識と思われるかもしれないが、フェロモンなど化学物質は、元々口腔上顎に存在する「鋤鼻器（ヤコブソン器官）」で受け止め、神経を通じて、大脳副嗅体の皮質で感知する。ところが、人類はこんな大事な機能が退化し、眼も鼻も耳も味覚も、みんな退化傾向。触覚も鈍くなり、震度3の地震があつても、『あら！そんなのあつたかしら：』とくる。これじゃ亭主が夜毎、香水の移り香を残して帰つてきても『遅くまでお仕事御苦勞さん』

尤も公麻呂によれば、「ネブタ」を見るのに青森に行く必要はない。夜毎隣のベッドで「寝豚」が鼾をかいていてではないか：。

そして私事。7年ほど前のパソコン囲碁ソフトは実力初段と言われ、私はそれよりはるかに強かつたから、やっぱり機械は人間に勝てるわけはない：と思つていたら、今年出たソフトは4段以上ということだ。私はなかなか勝てなくなつた。機械は1秒間に、27億手を読むという。あたかも私をせせら笑うかの如き手も打つてくる。こっちは、カッカして理性を失い、気がついてみたら夜中の3時とか、体調を崩しそうだ。

植物にも蚊にも機械にも知能が存在する。万物の霊長などと威張つていたら、こいつらに「コケ」にされる。

今生きている全ての生物は、過酷な環境に耐え抜いて生きてきた子孫である。チョットぐらいの放射能や、酸やアルカリにも、暑さにも寒さにも負けずに遺伝子変換をして生き抜いてきた者共である。それに耐えきれなかつた種は、みな滅びて

しまった。でっかい脳味噌だけが、ものを考える機関ではないらしい。

⑦象牙の密猟

こんな酷い話がいまだに横行している。歴史的にみて、体が巨大化した動物は自然と命の活力を失い、絶滅種へと進行する傾向がある。「象」も同じで、今、世界は必死になってその保護に全力を注いでいる。自然公園で保護している、象の繁殖率は年8%だが、何と密猟率は12%で、保護区であってもゾウの数は年々減っている。

今、アフリカの現地において、象牙の密猟が盛んに行われている。原因はとも、日本が絡んでいるらしい。その証拠は、密猟現場に踏み込まれた場合、重い象牙を持ち歩かなくても、ドリルで親指大にくりぬき（印鑑用）、荷を軽くして逃走できるからだという。今世界で、象牙の印鑑を使用しているのは日本だけらしい。しかも、大きな象牙を得るためには、子連れの母像を目当てに、まず子象を殺すという。人に威嚇されれば象の群れは散らばるが、子を殺された母像は、いつまでも立ち去らないので、犯人は簡単に母像を殺せる。作業もしやすくなる。しかも死体があれば、上空にハゲワシが舞うので、前もって、ハゲワシを毒で殺しておく、保護官が現場を発見しにくくするのだという。こんなあくどい犯罪の裏に、日本が絡んでいるとは、あまりにも情けなく、世界の「恥」である。

⑧エネルギー問題

1760年代に、イギリスで起こった産業革命時代の世界人口は約10億人。現在、人口は7倍に

膨れ上がったが、エネルギー消費量は50倍に増えたという。当然地球環境は汚染し、資源は枯渇しつつある。

「地球は未来人からの預かりもの」と言われているが、資源は、未来人どころか、あと百年さえ持ちそうにない。今生きている人類が、現状維持で化石燃料を使い果たせば、未来人に残す分など有りはしない。残るのは汚染した地球環境と不毛の沙漠だけ。そんな負の遺産は、子孫から受け取り拒否されることは明らかだ。

小泉純一郎元総理は、現政府に対し「原発をゼロにしろ」と迫っている。原発は大きな危険性を孕み、放射性廃棄物を埋める最終処分場の建設の目途さえ立っていない。それなのに原発政策を進めることは不見識だと言っている。

これに対し政府は、原発の代わりに火力発電は二酸化炭素を多く排出し、地球温暖化の元凶となる。シエールガス等化石燃料輸入費用（年3.6兆円）が余計に嵩み、電気料金値上げとなる。国富の莫大な損失だ。

原発技術者が減れば、原発海外輸出にブレーキがかかり、国内の原発廃炉技術者確保さえ危うくなる。国内産業も停滞し、企業の海外転出が進み、産業の空洞化が進む。自然エネルギーによる代替えは、微々たるもの（約1%）で、直ちに原発ゼロは不可能だと反論している。

さてこの押し問答を国民はどう判断するか？私は中米の貧困国に長期滞在し、燃料費不足で国営の発電所がしょっちゅう停電。電力不足による国民生活の不安定さをしみじみ経験してきた。安全な水や空気や電力は、有って当たり前とするなら、それは平和ボケというもの。不断の努力が

なければ、それらは確保できない。電力安定供給こそ、国の最重要課題と考える。

個々人の自由発言には総理並の責任が伴う。国家安定運営の船頭の気概で、時により清濁併せ飲む大局感が必要。危険なものはないのが一番だが、なし崩し的に国力が減退していくのも、ぜひ避けたいものだ。

じやかもこじやん

木村 進

石岡市八郷地区には柿岡の八幡宮と根小屋の七代天神社に約四百年以上前から伝わるといわれている神楽舞が残されていて、今日まで伝統が守られている。どちらも地元の名男が受け継ぐことになっていて（今では長男に限らない）「太々神楽」「代々神楽」と呼ばれている。

この神楽の事を、地元では通称「じやかもこじやん」とか「じやかもんじやん」と呼んで親しんでいる。

この一風変わった呼び名が何処から来たものかは明確になっていないが、一般の説明によると、神楽で奏でられる拍子の音から来ているのではないかと言われている。しかし、実際に聞いてみても、ジャカモコジャンとは聞こえない。

そこで、この呼び名について私なりに気がついたことを書いてみたい。

まず結論から書いてしまおう。「じやかもこじやかもん」は石神（しやくじん）、または宿神（しゆくじん）の事ではないかと思う。石神、宿神とは後戸の神である。「石神井」などでこの読み方も残って

いる。

よく神社のご神体が石であることは多い。また、拝殿の裏に本殿が祀られるが、本殿がない場合でも小さな祠が置かれていることも多い。そしてその祠の中は「ただの石ころ」だったりする。

天台宗の僧侶が修業したりする常行堂には阿弥陀如来像が祀られているが、この阿弥陀如来の後ろに姿を見せず不思議な笑みを浮かべた「摩多羅神（またらしと）」という秘仏が置かれている。この像はめつたに公開されることがないので、常行堂があるところでも、内部に存在しているかどうかも怪しいところが数多くあるが、今春に島根県の清水寺でこの摩多羅神の木造座像が公開された。

この寺は常行堂が今は存在しないので像の公開に踏み切ったものだと思う。絵画にも描かれていて、この摩多羅神の姿は少し不気味な笑みを浮かべた翁の姿である。そしてその翁の前で2人の子供が遊んでいるのである。これが能や狂言の猿（申）楽の原点であると考えられ、今でも能・狂言師などの信仰が篤いのである。

この摩多羅神の祭りとして最も有名なものは、京都太秦（うずまさ）広隆寺（太秦寺）境内にある大避（おおさけ）神社の牛祭りである。この広隆寺は聖徳太子の時代に秦河勝（はたのかわかつ）が創建したもので、秦河勝は朝鮮半島から大和にやってきた秦氏の一族である。この太秦（うずまさ）も秦氏の名前が地名に残ったところである。

この河勝は猿楽（能・狂言など）の祖と言われている。能楽の観阿弥・世阿弥親子も河勝の子孫を称している。

大秦の牛祭りはインド伝来の神「摩多羅神」が赤鬼・青鬼2匹ずつ、計4匹を従えて、牛に乗っ

てやってくる。そして厄除けの祈願文を読み上げ、読み終わると鬼は祖師堂に逃げ込み、摩多羅神の面が群集によってはがされることで、厄除けとされる。

では何故、この摩多羅神が能楽の祖なのか。それは世阿弥の「風姿花伝（ふうしかでん）」に書かれている。

一、仏在所には、須達長者、祇園精舎を建てて供養のとき、釈迦如来御説法ありしに、堤婆、一万人の外道をともし、木の枝・篠の葉に幣をつけて、踊りさげめば、御供養のべがたかりしに、仏、舍利弗に御目を加へたまへば、佛力を受け、御後戸にて、鼓・唱歌をととのへ、阿難の才覚、舍利弗の知恵、富楼那の弁舌にて、六十六番のものまねをしたまへば、外道、笛、鼓の音を聞きて、後戸に集まり、これを見てしづまりぬ。そのひまに、如来、供養をのべたまへり。それより天竺にこの道は初まるなり。

一、日本国においては、欽明天皇御宇に、大和国泊瀬の河に、洪水のをりふし、河上より、一の壺流れくたる。三輪の杉の鳥居のほとりにて、雲各この壺をとる。なかにみどりごあり。貌柔和にして玉のごとし。これ降り人なるがゆゑに、内裏に奏聞す。その夜、御門の御夢に、みどりごのいふ、われはこれ、大国秦始皇の再誕なり。日域に機縁ありて、いま現在すといふ。御門奇特におぼしめし、殿上にめさる。成人にしたがひて、才知人に超え、年十五にて、大臣の位にのぼり、秦の姓をくださる。「秦」といふ文字、「はた」なるがゆゑに、秦河勝これなり。上宮太子、天下すこし

障りありし時、神代・仏在所の吉例にまかせて、六十六番のものまねを、かの河勝におほせて、同じく六十六番の面を御作にて、すなはち河勝に与へたまふ。橘の内裏の柴辰殿にてこれを勤す。天治まり国しづかなり。上宮太子・末代のため、神楽なりしを神といふ文字の偏を除けて、旁を残したまふ。これ非曆の申なるがゆゑに、申楽と名附く。すなはち、楽しみを申すによりてなり。または、神楽を分くれればなり。

と書かれている。申楽は秦河勝が六十六個の面を造り、ものまねをすることから始まったもので、それが神楽となり、能楽の基になったのである。今ではこの神楽も六十六も演じるととても長くことになってしまうので、十二とか三十三とかに短縮されて伝わっているのである。また翁だけの三番叟（さんばそ）を行っているところもある。

では最初に戻って「じゃかもこじゃん」であるが、これは演目の「老翁（おきな）の舞」の事をさすと思われる。能や狂言での踊りを見ると、その中心は「翁」である。柿岡の太々神楽でも国堅く（がため）の次に舞うものであるが、説明では「高天原の最初の神である天之御中主神（天御奈加主命）（あめのみなかぬしのみこと）が、地上の島々を人が住めるような国にするため、剣で不要なものをなぎ払い、四方に柱を建て、地を踏み固めるしぐさの舞」を舞っているという。

この翁の舞を先日見たが、舞台の四隅で剣を突き刺し、腰を卑猥に振るしぐさをするのだ。まあ書かれたものはないがこれは生殖・子孫繁栄を表すものと考えてよいだろう。

さて、この「じやかもこじやん」という言葉の響きから「宿神（しゅくじん・じゅくじん）、石神（しやくじん・じやくじん）」を連想したのだが、この石岡の二つの神社には別な共通点がある。

それは、柿岡の八幡宮でこの神楽が始まったのは、文禄四年（1595）長倉義興が柿岡城主になり、佐竹公とともに伊勢神宮を参拝した折、奉納舞²⁴神楽の内の12神楽を持ち帰ったものとされ、もう一つの根小屋の七代天神社は佐竹公の客將太田資正（三楽）が片野城主となり、永禄年間（1568～1570）にが城の守護神として、久慈郡佐竹郷（常陸太田市）天神林から神霊を迎えて始まったと伝えられています。

柿岡城主となった長倉義興は、御前山と那珂川を挟んだ向こう側の小高い長倉の城主でした。一方太田三楽は生涯上杉氏に忠誠を誓った隠れた名将で、岩槻城を息子にとられたものやはり佐竹氏に請われて小田氏を破る活躍をした人物である。常陸太田や御前山・長倉近辺にしても岩や石などの信仰が強いと思う場所である。

宿神（しゅくじん）、石神（しやくじん）、杜宮神（しやくじん・杜宮司（しやくじ））などという言葉が次第に「ジャカモン」などと変化し、ゴロ合わせて「ジヤマモコジャン」となったのではないかと考える。まあそれ程根拠があるわけではないが、常陸国北部の神社などを訪ね歩いてみると、どことなくそんな思いがしてくるのである。

もう一つ土浦の「鷲（わし）神社」にも「じやまもこじやん」というお祭りがある。これは神楽ではなく「味噌おでん」を食べるといふ風習である。この味噌おでんは、里芋・豆腐・こんにやくなどを串刺しにして焼いたもので、別のパックに入れ

た味噌をつけて食べるものなのだ。まさに、おでんを田楽という言葉のルーツを表しているという。田楽踊りで、竹竿にしがみついて飛ぶ姿が串に刺した豆腐に似ていたことから串焼き豆腐を田楽と呼び始めたというのだから、これを「じやかもこじやん」というのもなんとなく頷げることが出来る。何か400年も前の事を想像することが出来る。伝統行事は大切に保存していかなければならない。

線力

伊東弓子

何でも早く出来る、大きな事が出来ることと評価される事が多いが、細かい事を地味に築いていく大切さを改めて感じた秋だった。

夕暮時だった。娘がある物を発見した感動を話し始めた。

「花だろうか。何なのだろう。珍しい物で誰かが置いた物かと摘んでみたが壊れそうですぐ手を放した。白いレース糸で編んだ物のように見えて触ってみたけど違った。じつと見ていると気持ちが悪くなった。桜塚の土手の篠笹に覆い被さる様に蔓や葉が延びていて、葉は胡瓜、糸瓜に似ている様な気がした」というのだ。

花が一つしかないというのも可笑しいが、考えるに、見まい聞かまいのあの古道の入口に昨年沢山咲いていた烏うりの花と同じだと気がついた。あの花はもの淋しげに夏の終わりに生命を燃やし晩秋の今、緑、黄緑、黄色に橙々から紅いへと変わる土産を残してくれる花に間違いない。翌日行ってみたがもう姿も影もなかった。

数日後の昼間だった。子供達が感動の声をあげた。蜘蛛巣があちこちにあるという。

「蜘蛛って気持ちが悪いなだよ。嫌いだ」

そんなこと言わずによく見る様にと話し、巣の形の素晴らしさ、仕掛けた巣は細くて見えないから怖い。でも細くて見えない畏れは強い。誰から教わったんだろうと問いかけた。木々に、軒下に、動かない物の陰にあるある。夏の獲物と違って小さな蚊がいっぱい掛っていた。冬に備えて食糧獲得だと数えて騒いでいた。

雨上がりの朝、私の叫び声に子供達が出て来た。小さな水滴がくもの糸について光っていた。細かい透き通ったビーズ玉で作られた飾りが下がっている様だ。重くないのか、壊れないのか心配を余所に揺れる度に赤味がかかって、黄金色に、青紺にと光を放つ。昔、神の怒りに触れて蜘蛛の姿になった女神の腕の素晴らしさを見るおもいだった。子供達はこの驚きを暖めながら登校していったことだろう。

道路沿いにある私の家は電線、電話線が目前にあり、邪魔にもなるがよく見ると電話線に列車が繋がっている様子が目に入るので楽しみが増えた。月夜にはそれが銀河鉄道が走っている様で夢が膨らむ幻想的な一場面だ。

今度はアッパ（お父さん）が発見。大きな蜘蛛の巣だという。五〜六米距離のある軒と電線に作られたものだった。大きさに驚き不思議としかいえない。大きければ重みも増すだろう。カンダカを先頭に何百という地獄の亡者が細いくもの糸を攀じ登ってきた事を思い出した。強いくもの糸に夏の名残りの青紺の朝顔が四つ花をつけ、くもの糸を伝っていた。蜘蛛も朝顔も夢に向かつて行った

のだろう。自然の強さと動植物にも求めていく心のある事に気がついて、身近な仲間とも思える。

坂を上ると太く大きい桑の木がある。変形した十字路の一角に立つ桑だ。以前はここは桑畑だったのだろう。畑道を右に左に曲がって行くと桑の林がある。一枚の畑の桑が生い茂ったのだ。養蚕が行われなくなつて十年以上伸び放題に伸びたのだ。私の覚えのある桑は根本が拳のように育ち細い枝が天を突くように上に伸び葉をつけていた。枝を切ったり、葉を取って蚕にやったのだから、伸び過ぎる暇はなかったのだ。生け垣が伸びすぎ枝切りをしていた男の人に合った。

「子供の頃、この道は高崎から原山へ行く道でお婆さんとよく通つた道だ」という。この辺は桑がよく育つ所だと話してくれた。私も頷いた。桑原ヶ丘一帯だから桑は沢山あつたらうとか。常陸国風土記の事、玉里の小学校、中学校の校章は桑の葉の形をしている事など話に花が咲いた。

自然の動植物から細い糸を取り出した人間がいた。この地で豊かに桑を育て、それを食べさせた蚕、そこにこの地の人の努力や苦勞があつた。ある嫁さんが家を出て実家に向かう途中人に見つからないように桑畑に隠れたと辛い話し。繭を集める家のお坊ちやまは人の出入りで忙しい日も、ピアノを弾いて菓子を食べ、靴を履かせて貰つての生活が出来た人もいたとのこと。学校から帰ると桑の葉とりの手伝い、遊びたくて逃げたり隠れて大目玉を貰う毎日だった。その人曰く、俺達は「餓鬼」蚕は「お蚕さま」と呼ばれていたと苦笑いして聞かせてくれた。ある女の人は製糸工場で交代で仕事をし、床の上に着の身着の儘で寝るといふ状態で冷え切つて、子の産めない体になつた

と遠い昔の苦勞話をしてくれた。個々バラバラでなく組合を作つて力を合わせていこうとリーダー格のお爺さんの話し。皆さん明治生まれの方達だった。犠牲も含め沢山の人が係つて進歩していった。細くて強い糸は人の手で素晴らしい布になつていったが今はその糸も、その糸で織られた布も変化してしまつた。

麻のことは生活の中で経験がなく分からないが、麻の糸は古くからあつたのだろうと考える。赤児には麻の着物を着せると幸せになるといふことで、母が縫つてくれたことを思い出す。男、女どちらの子でもよいようにと黄色麻の葉の柄の着物だった。肌触りの良い物だった。麻は真直ぐ成長するそう。麻の中で育つた蓬も真直ぐに育つといわれるそう。そういうところから出たものだろう。

綿は身近にあつた。どこの家でも綿をつくつていた。作業もいくらかでもあつた。六十代、七十代の人も何らかの手伝いをしてる話が多い。特に女達は家族の衣類を作る為に冬場は機織台に座りさりの日も多かつたと聞く。四人の娘を嫁に出す時の為に少しづつ織つていた人が根もつきたのか、運動会を見ている最中に倒れたことを覚えてる。細い糸を大切に共に栄えてきた綿屋も、紺屋も、染物屋も布田屋も姿を消していった。

そんな世の変わりゆく中であの友のことが偲ばれる。もう三十年余り前になる。彼女が左腕とも言われる友と一緒に始まつた大仕事がある。農村に生きて農作業をし、食事を作り洗濯をし、子供を育て舅、姑を世話し家族の衣類を作るため機織をしてきた女達の記録への取り込みだった。当時の七十代、九十代の女達から話しを聞き、綿も播

き育て、綿を取つて糸を紡ぎ、染色もし、織り上げ着る物を仕上げた。事ある毎に子供達にも経験の場をつくり、参加して貰つていた。大人の為にも土浦、小川、玉里にグループをつくり、育成していった。

常陸大宮西塩子の二百年前の文化年間の大幕が痛みが激しいので、平成の大幕づくりには、学芸員、東北の織姫さん、地域あげての取り組みに無報酬で五年の歳月を予定して月に二回遠い道を通い作り上げていった。完成の時の舞台が「農民歌舞伎」という題から伝わる印象が強かつたので、今回の大題目が立派すぎた。大幕の説明はあつたが、チラシ等にひとこと大幕の成り立ちなど加えて欲しかった。今、まつりを受け継いでくれた人は、あの一本一本の細い糸から出来た強い物の仕上がった事と人の手で作り上げていったこと、そこに人がいたことを確り伝えてほしい。

自然の中の烏うりの花も、蜘蛛の巣もあんなに心が弾んだ。繭から麻から綿から取り出した人間の発見にも拍手をしたい。細くて弱そうに見えても本当の力は分らないものだ。

私も毎日細い道、大きい道を走っている。目標を持って動いているつもりだが、ぶつかりながら走っている。仕上げの纏まりはつくれるのだろうか。

泉町の鐘馗(しょうき)さま

兼平智恵子

平成二十四年十一月当会報第七十八号より石岡のおまつりに華やかさを添える山車の上に乗る人

形十二体にスポットをあててご紹介してきました。今回は十二体目の人形、泉町の鐘馗さまです。

泉町は慶長年間（一五九六～一六二五）の府中町立て以後、寛永年間（一六二四～一六四四）頃までに、新たに作られた街道（水戸街道）沿いに形成された町並で、当初「新宿（あらじゅく）」「新町（あらまち）」と呼ばれ、府中松平氏の支配下の宝永年間（一七〇四～一七二二）に「泉」と改称されました。

呼称の由来は、当時火災がしばしば起ったことから、防火の願いを込めて水の源泉である「泉」町に改めたとされています。

泉町（渡辺薬局様通り）より一里塚（石岡市勤労青少年ホーム前）の道は、現在は平坦ですが、以前は山王川を中心とした田畑すれすれの道で両側には、幾つかの茶店があり、常に荷車や馬方衆の溜まり場となっていました。泉町入口両側には、見附の石垣があり急な坂下の底辺に鉄道の踏切があり、かつて自動車の事故があったので昭和八年、道路を高く土盛りして今の泉橋の架設となりました。

府中時代（江戸時代）には東北方面からの玄関口として泉町見附門が置かれたところで（石岡の地名より天保年間府中町絵図）から見ると現在の泉橋の泉町交差点辺りと見られる、昭和の初期まで左右に石垣が残されていました。先にも述べました泉橋架設の直前、跡形もなく取り壊されてしまいました。そして常磐線を跨ぐ泉橋陸橋は昭和八年一月二十五日に竣工し、盛大な開通祝いがおこなわれたそうです。

一九八三年昭和五十八年石岡市は茨城県より「歴史の里」に選定されました。全国的に歴史的遺産を重視する機運が高まっています。是非に石碑と説明板の設置を切望します。尚、府中公

民館入口の白い門は泉町見附門を模したものでそうです。

現在の泉町の町名は府中一丁目、府中三丁目、泉町となっており、中島自転車様、渡辺薬局様辺りから泉橋を渡り、一里塚を越え、菓のウエルシア辺りまでの水戸街道沿いに広がる町並で約八〇〇世帯と大きい町内になっています。

今回は知人である船見様より、鈴木様、本多様、石塚様とご紹介頂きましたが青年部の会長である浅田様にお聞きすることができました。現在活躍している鐘馗さまは第三代目で平成四年七月に山車新造の時、埼玉県岩槻市で購入されたもので第二代目は昭和五十二年の年番の時の鐘馗さまで現在は倉庫に保管されている。大正十四年に山車が作成され、初代の鐘馗さまは、米俵と交互の出番であったそうで、鐘馗さまは、すでに姿が無くなっているとの事でした。また幌獅子は二台出るとの事、町内の大きさを感じます。

鐘馗さまは中国の唐の時代の故事に出てくる神で、疫鬼を退け魔を除くという。巨眼で、多髯、黒冠をつけ、長靴を履き、右手に剣を執り、小鬼をつかむという勇姿で、江戸街道の入口（水戸街道）では出口、石岡の北口泉町で守りを強くしています。南口を守っている相町の幸町の武甕槌命さまと、共に石岡の民の無病息災そして、国家安穩を願って守っている事でしょう。

船見様、鈴木様、本多様、石塚様にはお忙しい中にご迷惑をお掛けしてしまいました。浅田様にはご協力頂き感謝申し上げます。有り難うござい
ました。
（参考資料・石岡の地名）

・ぐるり色染めて里の山 身もそまる 智恵子

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第七章 神話社会への潜入（1）

イラン西北部に「ハマダン」と言う都市がある。

四千メートル級の山々を背にした標高千五百メートルの台地に展開するシルクロードの要衝でありアレキサンダーに滅ぼされたアケメネス王朝。ペルシア帝国の夏の都として栄えたのだが、此の都市は旧い名称を「エクバターナ」と言い、イラン人（ペルシア人）よりも早く紀元前六百年代の初め頃にイラン高原へ進出して来たメディア王国の首都でもあった。冒頭から妙な話で恐縮だが、メディア王国の最盛期にアスチュアガスと言う変な王様が居て、マンダネという美人の王女が大洪水のような寝小便をする夢を見た。この夢をどのように解釈するか？と聞かれた神官（陰陽師）は、王様を怒らせない意見として王女を遠方に嫁がせるよう進言をした。それにより、メディア王女マンダネが属国のペルシアに嫁がされることになり、波乱万丈と言っても何となくすつこけたペルシア帝国の歴史が始まる訳である。この話は「ふるさと“風”」第二十号（二〇〇八年一月）に紹介したのだが、このペルシア帝国と言うのは紀元前五〇〇年から興隆して同三三〇年には滅亡する。

その後は多くの王朝が交代支配したけれども、カスピ海方面に在った騎馬民族のアルサクス王朝、パルティア国を滅ぼしたササン朝の王国が西暦二〇〇年代からイランに君臨した。ふるさと“風”の草創期に書いた「飛鳥の異邦人」ではイランから日本に伝わったと思われるものとして大相撲、

炬燵、胡座（あくら）、医学の麻酔、養蚕技術、砂糖黍、ゴマ、野菜（豆類、南瓜、人参、玉葱、油菜、瓜類など）、果物類（林檎、西瓜、メロン、プラムなど）を紹介したが、この国が古代の日本に与えた影響は大きいのである。敢えて付け足せば日本の皇室が使用している「菊紋」もイランの「ペルセポリス遺跡」に見られる。

ササン朝に滅ぼされたパルティア国の軍隊は騎馬民族らしく騎兵が主力で小型の弓を持っており、敵は是を追撃するのだが、パルティアの兵は疾走する馬上から振り向きざまに正確な射撃で敵を射倒した。これを「バルティアンショット」と言いローマ帝国も恐れたと言われる。その姿が奈良正倉院に伝わる壺や皿には正確に描かれている。

ササン朝ペルシア王国は遙か古代に宗教家ゾロアスターが創始した「拝火教」を国教としていた。現代でも僅かだが拝火教徒がイスラム国家のイランに暮らして居る。拝火教はゾロアスター教とも言うイランの民族宗教で、イスラム化以前のイラン文化の形成に大きな影響を与えたと言われる。この祇宗教は紀元前に中国大陸に伝わり「（けん）教」と呼ばれた。特に「火」を大切にして千年以上も前から燃え続ける火が現在も絶やさず守り続けられている。火だけで無く自然を大切にすることは結構なことだが、死者の遺体を野犬や禿鷹に喰わせる「鳥葬」が現代にも継続されている。その施設？も見たが、この教徒にはなりたくない。

遣唐使が開始され、或いは大化の改新（蘇我政権打倒のクーデター）が行われて実質的な日本の歴史の開幕とされる西暦六〇〇年代には、拝火教の信者であったかどうかは不明だが坂上田村麻呂の系統のようにササン朝ペルシア王国の人々が奈良に来

て居たらしい。正倉院の壺なども、そう言う人たちが持つてきたのではなからうか。実在が疑問視されてはいるが聖徳太子の時代・推古天皇の十四年（六〇六）には奈良の元興寺で出来上がった銅製の仏像を金堂に安置しようとしたのだが扉が小さくて入らなかつた。それを仏師・鞍作鳥が壊さずに中へ収めた。この人は渡来人である。感動した寺では人々に布施を施した。これが釈迦の誕生を祝う灌仏会（花祭り）の始まりとされるが同じ頃に盂蘭盆の行事も伝えられた。日本に居たペルシア（イラン）人が教えたのである。第四章でも触れたが現存する仏教行事の根源は拝火教にあるらしい。火は大事にしなければいけない。

その頃はササン王朝の末期であり、やがてサラセン帝国と呼ばれるアラブ系のイスラム勢力がイランを支配することになるのだが、漂流して来たのか、飛んで来たのか、当時の日本にウロウロしていたイランなどの異国人も多かったのである。余計なことだが飛行機移動の場合はイラン人のパイロットが途中の空港で時間をとってイスラム教徒特有の丁寧なお祈りを始めるから異教徒の乗客は逆に何となく不安におちいる。

一九八〇年から一九八八年までイランはイラクと戦った。当時のイラクにはアメリカなどが付いていたからイランは苦戦をした。しかし、かつて王政時代のイランはアメリカの同盟国であった。王政が破綻し、宗教指導者のホメイニ師の帰国で

「昨日の友は今日の敵」になったのである。アメリカ大使館は憎しみを込めた角材で封鎖され反米の落書きが飾りになっていった。ただしイランも経済的な事情があるので、接収した米国資本のホテルを、名前だけ変えて営業していた。食器類や道

具には米国時代のロゴや名称が付いていて飲み物は中東らしく紅茶優先：私はわざとコーヒーを注文してみたが、暫く時間をかけて米国のインスタントコーヒー（粉末）とポット（湯）が出てきた。会議を開いて許可したのか？：たかがコーヒーでも国際情勢は常に動いているから対応が難しい。国家の為には大物の外務大臣を総理大臣の上に置いた方が良いかもしれない。

日本では報道されていないが、イラン・イラク戦争ではイラク軍がイラン国土の深くにまで攻め込んでいたので、各地に戦死者の墓地があった。イスラム教国でも独特の理念を持つシーア派の国であるイランでは戦死者の墓地が鸚鵡の籠のような鉄の囲いで守られる。国境に近いハマダンも空爆などで大きな被害を受けたけれども元来が簡単な建造物であったから修繕も容易に出来そうに見えた。私が行ったのはイラン・イラク戦争後に日本では最初（世界で二番目）のツアーであったから検問、検査続きで観光客というよりスパイ団のような目で見られ、飛鳥・奈良時代に日本に文化を伝えてくれた国とは思えなかつた。特にテロを警戒したのか空港では「バッテリー」と敵国語で言っ

てカメラの電池を没収しようとした。私は、聞かない振りをしてポケットから菓子の箱を出した。検査官が菓子に注目したので其れを差し出し向こうが喜んでいる間に検問を出してしまった。ハマダンでは、夜明けに一人で散歩に出て道を間違えた。危うく現地の浮浪者になるところ早起きして道端で焚き火をしていた街のオジサンに助けを求め、ホテルに連れ帰って貰った。ペルシア語など一言も分からないのにホテルの名前を連呼しただけで窮地を脱することが出来た。古い時代

からイラン人と日本人は交流していた―という思い込みが有つての失敗だが、それは「飛鳥時代の話」と気づいたのは帰国後のことである

冒頭に紹介した奇妙な夢の主と言うより怪しい王様の時代から少し前にメディア王国はアッシリア帝国を滅ぼした。大英博物館にはアッシリアの王と王妃が敵の親分の首を木に吊るして、それを眺めながらティータイムを楽しんでいる平和的？なアラバスター彫刻が保管されているらしい。その残虐な王が有名なアッシュニバル王である。

時代は紀元前六六〇年前後とされているが、当時の「世界」は、ごく大雑把ではあるがエジプト、西アジア、インド、中国に王国があり、それと地中海周辺にギリシアとローマ帝国が顔を出し始めていたぐらいで、アメリカ大陸にはマヤ文明の先駆けに相当するような文明が芽生えていたのかどうか：中国の王朝は、最古とされる「殷（いん）」の後に興った「周王朝」であつたらう。

人類が狩猟採取の暮らしから農耕と牧畜の生活に転換した頃（約一万年前）、犬たちは羊の群れが同じ道を往復することに着目した。普段は先祖の狼を気取った単独生活をしているけれども狩りをする時だけは「犬の遠吠」を利用して仲間を集め「犬族臨時狩猟組合」を作った。狩りが終われば報酬の肉を貰って孤独な暮らしに戻る。犬よりは増しな人類が組織化しない訳が無いので地中海沿岸やバルカン半島、エジプト、西アジア、中国大陸には国家が存在したのである。それらの遺跡からは文字を伴った出土品が発掘されて古代国家の概略が後世に知られるようになった。

さて、他国はどうでも、その頃の日本はどうなっていたのであろうか：このシリーズの第一章

（序章）でも触れたが先住民の人たちが「縄文人」とか言われながらも豊かな国土で平和に暮らしていたのだと思う。或いは地域的ながら王国が存在し、寝小便はともかく、寝言ぐらいいは言う王女がいたかも知れない。しかし肝心の文字による記録が無かつたか、有つても公表出来ない事情から伏せられて分からないだけである。そして唐突に歴史として登場してくるのが「古（いにしへ）天地（あめつち）未だ別れず陰陽分れざるとき、混沌と溟滓而（くもりて）鶏子（とりこの卵）の如く：（日本書紀）或いは「…それ根元既に凝りしかども、気象いまだ敦（あつ）からざりしとき、名も無く為（わざ）も無く誰かその形を知らむ：（古事記）」と地球誕生に始まるような奇怪な物語であつた。本来ならば、冒頭に述べた王様のように人間らしい記録で国家の始祖となる人物を紹介しなければならぬのが歴史である。

古事記が書かれたのは元明天皇の和銅六年（七一三）、日本書紀は元正天皇の養老四年（七二〇）とされている。そして既に大部分は無くなっている諸国の風土記を編纂するように命じたのが古事記完成の翌年である。古事記は書かれたものの、すぐに「お蔵入り」になって長い年月、世に出ることが無かつたと言われる。そして日本書紀に記されたことが日本の歴史になった。内容としてはどちらも基本的には同じで有ろうと思うのだが、当時の政府と言うか権力者の藤原不比等にとつて古事記の表現は都合が悪かつた？その為に諸国から風土記を出させて細かいことを知ろうとしたのであろう：では、何処が悪かつたのか？

個人的な意見だが、先ず古事記の編纂を命じたのは天武天皇であり、天皇の死により中断してい

たものが元明天皇に依つて復活したこと、次に太安萬侶は長々と「序文」を書いているが、その序文の中で安萬侶は何人かの天皇を褒め称え、また古事記の元になった資料が天武天皇の努力で集められたと称えている。さらに当代の元明天皇が優れた天皇であり、後代の為に従来の誤つた歴史記録を正すように安萬侶に命じられた：と自分の手柄を強調している。古事記、風土記の編纂は右大臣である藤原不比等が命令したのであるから面白いし、また、不比等は幼い頃に壬申の乱で大海女皇子こと天武天皇に殺されそうになつた。それやこれやで、古事記と日本書紀が同じ様な内容であるから古事記を没にして日本の歴史は日本書紀によることにしたのである。但し、それを決めた直後に藤原不比等は死んでいる。他人に恨まれるようなことはするべきではない。

古事記は日本書紀に比べて文学的であると言われる。庶民にとつては内容が同じならば文学的なほうが面白い。一旦は没にされても、何処からか出てきた古事記は多くの学者によつて考証されることになった。その一方で、古事記以外にも日本の古代については、江戸時代辺りから「魏志倭人伝」に書かれた女性ボスの正体を解明する研究とか日本国中に二十万基とも言われる古墳の研究、或いは中国大陸や朝鮮半島に在った国々との関係が記された文書などの解説に多くの学者・研究者の方々が努力をされて、それまで「紀元節」を根拠に日本国家の成立をアッシリア帝国並に紀元前六六〇年としていたのは大嘘だと分かつた。このことは書き始めの序章でも触れた。言うなれば日本の歴史は嘘から出発したのであるから、これを正直者が納得できる歴史に直すことは容易では無

いのである。迂闊に動けば「非国民」にされる。

ペルシア人が孟蘭盆などの行事を伝える何百年か前に、朝鮮半島から流れて来たか、湧いてきたのか、悪意で言えば「喰いつめて日本列島に入り込んだ」連中が西暦紀元前後には山陰地方や九州方面に住み着き王国らしき組織をつくった。

その勢力が東へ東へと進んで来て各地の先住部族などを圧迫し、支配し、或いは滅ぼして最後に近畿地方に程々の王朝を開いたと言う日本国創設の経緯は、いつ頃から明らかにされていたのであるか。江戸時代中期には国学の研究が盛んに行われていたという。ところがNHKドラマの「陽だまりの樹（手塚治虫さんの原作）」で知られたように徳川幕府の屋台骨が腐り出したから、関ヶ原合戦で屈辱を味わった薩摩・長州などが官軍と称して大樹の徳川を蹴り倒し明治新政府をつくった。新政府の頭官となったのは官軍に付いた諸藩の主の下級武士であったから自分の主君をシンボルには据えたくない。必然的に政治を預かる者の権威の裏付けとして天皇制が強化されることになる。其の為の教本としては、無断で「神様」を利用した古代神話が格好の題材になる。

神話には支離滅裂なものが多いけれども、神様自体が「思い込み」の世界であるから本人さえ納得すれば統治には有効である。こうして先進諸国を目指し文明開化に明けた明治時代ではあったが国家として国民に叩き込む日本の歴史が「古事記」「日本書紀」に逆戻りしてしまったのであろう。

第二次大戦後は多くの先生方が「本来の日本の歴史―日本国誕生の真実」を求めて真摯な研究を続けておられる。大國主命神話を伝える出雲王朝を始め、日本史から消されてしまった九州王朝など、

この国を大和朝廷一本にするために従来は教えて貰えなかった歴史が次々と解明されている。有難い時代になったのである。

「虚構と真実の谷間」を模索しようとするこのシリーズでは第一章から第六章まで幼稚な感覚で種々の時代での「嘘探し」をしてきた。科学技術の分野で様々な発明発見が成される現代でも誇大広告や詐欺事件が横行しているから、嘘は人間の業なのであろうか尽きることが無い：「初心に帰る」と言うのも大袈裟だが、第一章で概略を述べた古代社会についての考察として、少年時代から国策として無理に叩き込まれてきた、いわゆる神話の世界に戻ってみると失礼な言い方かも知れないが、その内容は単純な「嘘」というよりも妄想狂の世界に近いことが分かる。然しながら、それを現代感覚で見直してみると、其処には権力闘争に勝利して此の国の支配者となった側のなりふり構わぬ自己弁護、体裁づくり、正当性主張などが見られ、神様のベールを捨てた当時の人々の姿が浮かんできて何とも面白い。

日本の神話と言えば既に述べたように豆腐の製造過程のような嘘から始まっているが、本来の国家の歴史は、成り立った国土に、いつ頃どういう民族が住み始めたかを記録すべきなのであり地質学と混同させてはいけないと思う。尤も独得の神話で知られたギリシアの歴史は「…神様が世界の国土を造り終わってからギリシアを忘れていたことに気付き、余った少量の土に岩石を混ぜ、それに虹の欠片を捏ね混ぜて息を吹きかけ、海に漬けて創造した…」ため紺碧の海、無数の島嶼、奇岩景勝、風光明媚な国土にはなったが、住民は常に食糧不足と貧困に悩まされているそうであるから

実に丁寧な国土用の原材料生成から始まった日本の国は豊饒な土地の証しなのかも知れない。

その恵まれた国土の初代とされるのが神武天皇であるけれども、紀元前六六〇年は余りにも粗末な嘘なので忘れて頂いて、西暦六〇〇年代の半ばに起こった「大化の改新」と言うクーデターで倒された蘇我王朝の時代、それ以前に想定されている崇神王朝、應神王朝、継体王朝、出雲王朝、九州王朝など、近代における先生方の御研究で従来の歴史からは消されていた日本の黎明期が見えてきている。その中で特に神秘的且つ人間的と思われるのが西暦三百年代に奈良盆地に興った古墳文化を伴う王朝であろう。伝えられる神話の多くはその時代のことと推定している。察するに何らかの事情があつて朝鮮半島などから夜逃げをして来た連中が、一旦は九州地方に落ち着いたけれども九州は暑いし大陸からの借金取りに追われ易い。そこで東へ東へと侵略して来た。自然に恵まれた土地を見つけたから、善良な先住の人々を脅かすか、騙すか、手なずけるかして日本各地を支配し、ボスが適当な王朝を建てた。その際に「天から降って来た」という馬鹿みたいな神話で誤魔化したのである。落下傘もオスプレイも未だ無い。

それだけなら未だしも、其の中の何処かの王朝が西暦六百年代の半ば頃になって本国の朝鮮半島に在った母国（百濟など）との関係から唐（中國）と新羅との連合軍を相手に戦争を始めた。敵は大國の連合体であるから勝てる道理がない。黄海まで出撃し「白村江（はくすきのえ）の戦い」でコテンパンに負けた。大日本帝國が米英諸國に負けた昭和二十年頃（終戦直後）のような混乱期になり日本を負かした唐と新羅の軍隊が進駐軍として九州方

面に来ていたらしい。このことも歴史として隠されている。九州以外は占領されなかったようなので負けたのは九州王朝の軍勢と思われる。そして、早くから九州を出て奈良盆地に巢食っていた下請けの大和王朝も、百済国との義理で「負け札」を買わされたようである。本来ならば「敗戦国」の仲間に入る筈の大和王朝ではあるが、九州に行つたけれども戦争責任を上手く逃れて深く追及されずに済んだから、古事記にも日本書紀にも「占領下」の記録を入れずに済んだ。国家の記録として嘘つきも悪いが、事実を隠すことは嘘と同じ罪になりはしないか、と心配している。

当時の日本の王朝は朝鮮半島と密接な関係があり、この敗戦を機に「潰れた組」と「生き残った組」さらには混乱に乗じた「新興組」が出来たと思われる。大雑把に言えばヤマタイ国だとか、ヤマシイ人物だとか、いわゆる神話時代から細々と続いてきた中小企業のような古代国家は既に倒産するか時代の波に呑まれて消滅していた。第一章で其の流れを紹介したが、先ず出雲王朝が出来て、次に九州に強力な王朝が出現する。そのイチ族だかサン賊だか分らないが、勝手な希望に燃えて東へと勢力を広げて来る。その中に古代神話に登場するヒーローが何人いたかは当事者でないとは分らない。むしろ無名の戦士が多かったのでは？

混乱期を克服して（下サクサに紛れて）政権を手にしたのは大和朝廷だと言われており、此の時代が天皇制国家としては「日本の草創期」なのであるうか。当然のことだが新興国に歴史は無い。そこで従来の日本国土に展開していた中小諸王朝の歴史を掻き集め「良いところ取り」で日本の歴史を作り上げるようになった。これも嘘と同じくらいに

良くない。ところが其れまでの王朝の記録は大化の改新という軍事クーデターの際に大半を焼失してしまつたから肝心の部分に分らない。歴史というのは抜けていたのでは意味が無い。そこで古老がうる覚えに口承していた神様の話に頼ることになった。それが日本を「神の国」とする所以であるが世の中、正義は有るもので頼りにしていた古老たちが覚えていたのは、どうでも良いことばかり；国家として大事な部分が抜けていた。

中大兄皇子こと天智天皇は、即位後十年で世を去つたから政局の立て直して終り、歴史創作までは手が回らなかつたと思われる。ところが後継者の大友皇子こと弘文天皇に引き継がれるべき皇位は「壬申の乱」で大海女皇子こと天武天皇に奪われた形となり「日本の歴史」は其処がスタート地点になつたのである。弘文天皇は、西国の兵に期待したのだが「白村江の敗戦」に懲りて志願兵が集まらなかつたらしい。負けた天皇は自殺を余儀なくされ、天皇の地位も剥奪されてしまつた。その復活に努力したのが水戸光圀であることは第一章で述べた通りである。これは偉業と言える。

どういふ訳か壬申の乱に於ける大海女皇子の進軍経路が実は九州から大和に進駐してきたという神武天皇の東征路に合致するという。そうなるに従来は「神話の世界」として疑問も持てなかつた古い話についても、その考え方、見方を変えれば古代神話が史実に近づいてくることは有るのかも知れない。素晴らしいことであると言ふよりも、当時の人たちは素晴らしい嘘を書いた。現代の政治家も中途半端な嘘で国民を騙すのではなく、何処から見ても「成る程」と思わせる嘘で危うい政治を切り抜けて貰いたい。（頑張れ嘘つき！）

その辺りの、歴史と言つても権力闘争のような記録は大雑把に「大化の改新」として総括されたからであろうか、天武天皇が編纂を思いついたという古事記では推古天皇の後、舒明（じよめい）天皇から元正天皇迄の八十四年間が抜けている。舒明天皇では無く除名天皇だったのか；国家の歴史を書くのであるから八十四年前で止めては意味が無い。やはり何かがあつた？太安萬侶が商売上手で、自分にとつては近代に当たる裏話の多い部分を「別売り」で儲ける心算だったのかも知れないが；先ずは、是までに「ふるさと」「風」に書いた神武天皇などの行動やら古墳に関わる記事、さらには常陸国風土記に書かれた物語などを含めて神代から人間社会に変わる時代を、もう一度現代社会の観点から見直し「人間探求」の目的に替えて考察してみたいと思う。古代社会のことであるから当然、嘘が増えたり減つたりする。

古事記の世界と言えば、本来は神々の誕生から始まるべきかも知れないが、登場して貰いたいのは「人間」であるから、神倭伊波禮毘古命（かむやまといわれびこのみこと）後の神武天皇の行動から追いかけてみる。神様は、その中で必要に応じてゲストとして登場して頂く。なお神倭伊波禮毘古命では名前が長過ぎて面倒なので以下は「神武天皇」で通させて頂くことにする。神武天皇については「ふるさと」「風」の原稿を書くのには是までも度々登場願つている。この天皇は架空の人物とする意見が多いようであるけれども、もし仮に実在していたとすれば、自尊心が強く、がむしゃらで、他力本願、自分の立場が良く理解出来ない面白い人物であつたかも知れない。

部下を率いて九州から出て来たと思われる神武

天皇は、途中で浦島太郎に道を訊ねているから、お馴染みの亀と仲好しのオジサンの童話は日本を代表する古い話になる。そして大阪湾から熊野の山岳地帯に踏み込んだ。ここで熊の化け物に遭遇し、軍隊が全滅の危機に直面した。それを鹿島神宮の祭神である建御雷（建甕槌）命に助けられた。

この話は第一章（序章）でも触れたが、建甕槌命は神武天皇の危難を知らずにいたので、恋人だか女友達だかの天照大神から電話で頼まれて救援したらしい。それも、自分は昼寝の時間だったから丸投げで下請けに出した。日本の企業体質は神代時代から出来ていたようである。神様は天上に居て下界を見下ろしているのだから、情報は共有しているものと思っていたのだが：政治がダメな政党のように、やたらと派閥があったのか？その為かどうかわからないが建甕槌命の下請けで実際に神武天皇以下の遠征軍を救ったのは「高倉下」という零細企業の神様であるけれども、下請けであるから粗末にされていて、伊勢神宮や鹿島神宮が有名なのに比べて、一番に活躍した有限会社の「高倉下興業社」は全く無名である。これも第六章で述べた「万骨の法則」なのであろうか：。

九死に一生を得た神武天皇は、兄宇迦斯（えうか）、八十建（やそたけ）、登美毘古（とみびこ）、兄師木・弟師木（えしき・おとしき）などという先住の部族長を殺害して近畿地方を占領したのであるが神話の世界では「伏はぬ（まつろわぬ）」従わない。賊どもを退け撥い（はらい）…：と云う表現になる。新興勢力が伸びて来る段階では日本国中が理不尽な征服被害に遭った。そう言う事例が多すぎる。「勝てば官軍、負ければ賊軍」の論理は明治維新だけでは無かった。気の毒な犠牲者は捨て去られる歴史

の法則に従い神武天皇個人の動向を辿ることにするが、古事記に記された神武天皇の記事は兄と共に九州から出稼ぎに来て、途中で兄が戦死し苦勞をした話と、結婚（皇妃選定）についての話題しかない。出稼ぎの苦勞は行商のオバサンでもするから此処は「皇妃選定」に焦点を当てて見ようと思

う。

このことは、石岡地方の古代史（龍神山の伝説）にも深い関わりがあるけれども、既に「ふるさと」風」第九号の「龍神山挽歌」、第二十六号の「伝わりしもの」などで述べているように、石岡市は歴史を大切にせず、看板だけ「歴史の里」を称しているから全く同じ伝説を持つ水戸市の歴史として定着してしまっている。石岡市では市史に記録されているだけで遺跡が無いから、市民にも忘れられてしまう。誠に残念なことであるが：。

神武天皇は更に奥地へ進もうとした。功名心に逸る神武天皇の行動を心配した天照大神は、神様の世界では最古参になる高御産巢日神（たかみむすびのかみ）に「未知の世界は危険だから、やたらと深入りするな！」と忠告させた。考えてみると建甕槌命の場合と同様に此の辺りの状況設定も矛盾がある。神武天皇と天照大神とは年代的にかけ離れているし、神様に年齢は無いとしても心配ならば神様ナンバーワンの天照大神なのだから他人（他神）に頼まず、自分で守ってやるか、直接に忠告すれば良い：戦時中だとそう言う疑問を持つ者は「非国民」という称号で弾圧された？

この神様（高御産巢日神）は顔が広かったから八咫鳥（やたがトリ）のからす（大鳥）と言う名の地元の豪族を案内人として付けさせてくれた。こうして神武天皇は神様の心配を余所に、突っ走って近畿地方の征服

をほぼ終了したのである。奈良県北西部の伊勢街道に近い辺りに居た先住民族を討ったのが最後の戦いになる。神武天皇も兵士たちも疲れ切って、食糧も欠乏したので救援物資をカンパして貰うため近辺の豪族たちのところに電報を打ったのだが、古事記では次のような歌を天に向かつて詠んだことになっている。

楯並めて（並べて）伊那佐の山の（奈良北部）
樹の間よも 行きまもらひ（見守って）

戦へば 吾はや飢ぬ（戦争で腹が減った）

島つ鳥 鶺鴒（鶺鴒）が徒（ともがら）味方

今助けに来ね（誰でも良いから、魚でも何でも食べ物を持つて早く救援に来い！）…：。

：余程、空腹であつたらしく実にガラの悪い歌である。大日本帝国の始祖は山賊の群れか：。

歌手でも無い神武天皇が下手な歌を謡つても、お客さんは来ないと思うのだが、この歌に反応して天から降つて（救援に）来たのが邇藝速日命（にぎはやしのみこと）であり、宝物（この場合は一番、有難い食糧）を献上した。そのお蔭で神武天皇は近畿地方を平定することが出来た。邇藝速日命は別名を天照国照彦火明櫛玉邇藝速日命（あまてるくにてるひこほあかりくしたまにぎはやのみこと）という長い名前だそうである。現代でも太陽神・穀物の霊神として埼玉県所沢市、東大坂市、奈良県大和郡山口市ほかに祀られているという。食糧支援が本業では無くて古代呪術を司る、つまり「死者の魂を呼び戻す霊力」が本来の特技とされる凄惨な神様だそうである。神武天皇はそれを知らずに、その辺の弁当屋と間違えて、差し入れて貰った握り飯をバクバクと喰らった。

話の本筋からは少し逸れるが、神話の世界を説

明するために触れて置くと、此の長い名前の邇藝速日命は、いわゆる「天孫降臨」で天から降つて来た天照大神の孫・邇藝命（にぎのみこと）の異母兄弟で、然も邇藝命よりも早く地上勤務に就いていた神様である。つまり戦時中の皇室観から言えば、この人（神）こそが天皇家になつて然るべき家系なのである。かなり進んだ現代にも「勤皇の志士」が居そうなので「馬鹿を言うな」と言われる前に説明すると次のようになる…

◎天照大神―正勝吾勝天忍穗耳命―邇藝命―日子穗徳出見命―鵜葺草葺不合命―神武天皇―
（あまてらすおおみかみ―まさかちあかちあめのおしほみのみこと―にぎのみこと―ひこほほでみのみこと―うがやふきあえずのみこと…）

右の系統で邇藝命の配偶者が高木の神の娘・萬幡豊秋千幡比売（よろずはたとよあきはたひめ）の場合が現在の皇統になり、同じ高木の神の娘でも拷幡千千姫（たくはたちちひめ）を妻とするのが邇藝速日命の系統になる。二人の姫は或いは同一人物かも知れない。同じ系統でも、天皇になる道と、そうでない道とが分かれる。

神様の運命を分ける父親の高木の神は正式名称を高御産巢日之神（たかみむすびのかみ）と言い、天照大神の頼みで神武天皇に冒険を止めるように忠告した神様であるが、俗に八百萬（やおよろず）と言われる大世帯の神様界でも天照大神に次いで「ナンバー2」の地位にあつて、何処かの国の將軍様と同じくらいに偉い神様であるから本来は雑用などすることは無いのである。是だけでも日本の神話が「嘘」で固められていることがわかる。嘘は上手につかなければいけない。

皇統の在り方から言えば、神武天皇と立場が逆

になる地位に居た邇藝速日命は、早くから民間に天下りをしていた。実は空腹が満たされた神武天皇が最後に攻め滅ぼそうとしている在地豪族の登美毘古（とみびこ）に既に迎えられており、登美毘古の妹で登美夜毘売（とみやびめ）という女性と結婚して宇摩志麻遲命（うましまじのみこと）という子供までいる。その子孫が後に物部（ものべ）氏になるのであるが、その時は侵略して来た神武天皇と登美毘古との間に立つて両者の調停をどのようにしようか邇藝速日命は悩んでいた。

取り敢えず両首脳に会談をさせたのだが神武天皇は先ず、登美毘古が「神の子」として邇藝速日命を受け入れているのに、遠征して来た神武天皇を受け入れない無礼を責めた。登美毘古は、邇藝速日命が天下つて来た際には「神の子」の証拠である「天の矢」と「歩鞞（かちゆき）矢蓋、当時の武士は馬に乗っておらず矢蓋は腰にさげた」を持つていたので、このお方が神の子である―と判断した旨を答えた。そして「神の子が複数で居る訳が無い」として神武天皇を拒否する姿勢を示したのである。（立派！）会談は決裂し、神に従わない賊として登美毘古は征伐されることになった。

登美毘古と言うのは、かつて日本軍人には最高の榮譽であつた「金鵄勲章（きんしゅうくんしょう）」の故実とされた金色の鵄（とび）が飛んできて神武天皇の危難を救つたという戦いの相手「長髓彦（ながすねひこ）」のことである。長髓は土地の名であり其処を治めていた人物の本名が登美毘古なのである。金色の鵄の話は神武天皇よりも早く現地に來て土着していた九州出身の邇藝速日命が義兄を裏切つて神武天皇に味方をした―その行為を正当化する為に作られた美談である。邇藝速日命のお蔭

で神武天皇は近畿地方を平定して皇位に就くことが出来た。現実には近畿地方で小王国を立てたのであろう。物部氏は大伴氏と並んで古代の天皇制を支えた部族のようであるが地元勢力との関係も推測される記事である。登美毘古を滅ぼしたことにより、神武天皇に仮託された九州勢力の大和地方征服は一段落する。

本題の結婚問題になるが、神武天皇は既に九州に居た頃に阿比良比賣（あいらひめ）という女性と結婚して、多藝志美美命（たぎしみのみこと、岐須美美命（きすみのみこと）という二人の子に恵まれていたが、阿比良比賣が名前どおりに愛らしく無かつたのかどうか、自分が天皇になるについて、皇后として相応しい女性を募集することにした。そこで家臣に命じて家柄、祖先、親族、美貌、財産、学歴、趣味、性格、身長体重から友人関係、飼犬、愛猫の種類まで調べて最高の物件（夫）候補を探してくるよう命じた。

暫くして大伴氏の祖先になる大久米命が或る情報聞き込んできた。「神の御子（みこ）が見つかった」という触れ込みである。面白いことに「神の子」と言う噂だけで、皇后としての厳しい条件であつたイエガラもトリガラも関係がなくなつて出生の経緯だけが調査されることになった。これが日本人の良いところである。大久米命は自ら近辺の農家を訪ね回り「神の子」の噂を収集して噂が本当であると確信した。最終的には神武天皇本人を連れ出して実物を見学させた。

その女性は三島の湊咋（みしまのみぞく）という人物の孫娘である。名前から推定すると此の湊咋は地元で土木工事を営んでいたらしい。娘が一人居て名を勢夜陀多良比賣（せやだたらひめ）と言

った。容姿端麗で美貌の女性として知られていたのだが、年頃になって誰かに見染められたらしい。この誰かの正体が分からない。

(第一章でも勢夜陀多良比賣に触れたのですが、この女性は神武天皇の正室では無くて、正室の御母堂になるので、改めて訂正してお詫びします。正室となる女性が、これから登場します。嘘について申し訳ありませんでした)

イラン高原に在ったメディア王国の王女が父親から「寝小便」の疑いをかけられたことを紹介したが、この勢夜陀多良比賣は或る人物？の所為で寝小便の疑いどころか、現実的な恥ずかしい被害に遭ったのである。この話は先に述べた「伝わりしもの」でも概要を紹介しているが、改めて詳しく述べるようなことになる。―内容としては詳しく述べるような話では無いが、古代から伝わった物語の一部なのでご了承を…。

神武天皇が正妃となる女性を探し始めた時期からは十何年前になるが、若く健康な乙女である勢夜陀多良比賣は日々快眠快便：当たり前のことだが美人でもトイレには入る。大昔のトイレは近代的に出来て居て全てが水洗式であった。水洗と言っても小川の流れに板を渡して、そこで用を足すから排泄物は綺麗に流されてゆく。余計な心配だがペーパーは木の葉でも使ったのかどうか…。ある日、勢夜陀多良比賣がトイレ使用中に上流から一本の矢が流れてきた。矢は赤く塗られていたから目に付くが発見してもどうすることも出来ない。流れに従って取水口からトイレ内に入ってきて勢夜陀多良比賣の急所を突いた。比賣は驚き騒ぎ無意識のうちに其の矢を掴んで走り回った。事件にも犯罪にもなるので証拠品として朱色の矢を家に持ち帰ったけれども警察は未だ無かった。

恥ずかしい話であるから誰にも言えず矢を部屋の隅に置いてどうしようか考えていた。ところが、その矢が一人の男に変身した。古事記には「忽ちに麗しき丈夫(おとこ)になりぬ」とある。ハンサムだと身元保証が省略されて、何の証拠も無いのに「矢な男」は神様にされてしまった：神様の名前は「美和の大物主神(みわのおおものぬしのかみ)」：大物主神とは大国様で知られた大国主命とする説もあるが、この場合は本来の大地の神としたほうが良さそうである。近くの三輪山に棲むというが、鎮座されている文字通り「オオモノ」の神様なのである。神様にしては行動が直接的に過ぎる。嘘のような話であるが、紛れも無い嘘であろう。しかし日本では、これが歴史の一部になっていたのであるから素晴らしい。現代的に割り切っていたらせて頂ければ、付近一帯のボスが美人に目をつけて犯した？美和の大物主神についてはこれからの話の展開で頻繁に登場して頂くことになるけれども：どうか軽蔑しないで頂きたい。

その怪しい神様と勢夜陀多良比賣は結ばれ(話が早過ぎて申し訳ない)生まれたのが富登多多良伊須須岐比賣命(ほとたたらいすすきひめのみこと)別名を比賣多多良伊須須氣余理比賣(ひめたたらいすけよりひめ)と言う。最初の名前では都合が悪いので改名したらしい。「富登」とは女性の性器を表現するので、幾ら神様の所為でも「トイレ事件」を想起させる名前は良くないと気がついたらしい。昔の人は事実を正確に書いた：この話と同じ内容で京都の下賀茂神社には祭神の玉依姫命が赤く塗られた矢で火雷神(ほのいかずちのかみ)の子を産む話が伝わる。神秘的では有るが神話というのは筋書きが単純でワンパターンなのは致し方ない。根は同じなのであ

ろう。

神武天皇から難題とも思える条件で皇后探しを命じられた大久米命が、村一番の美人を探して来て適当な「神話」を創作したのかどうか疑問はあるが、母親の勢夜陀多良比賣と流れ者の神様である「赤矢」との間に生まれた比賣多多良伊須須氣余理比賣は村の娘たちに混じって野原に出ていた。

大久米命は其処に神武天皇を案内した。娘たちの集団は野原で花を摘んでいる。大久米命が教えるまでも無く、伊須須氣余理比賣を見た神武天皇は直ぐに「この娘だ！」と見分けた。大久米命は「如何でしょうか？」と神武天皇を見たが、天皇の尻が下がったので伊須須氣余理比賣に事情を説明して返事を聞いた。その時に大久米命は権威を誇示するために出来損ないの歌舞伎役者のような顔の隈取(くまどり)刺書(さしが)をしていながら、伊須須氣余理比賣が怪しんで質問をしたけれども、神武天皇に仕えることには嫌とは言われなかったので正式に皇后として宮殿に入った。顔に刺青をしていた大久米命は現地採用された役人かも知れない。

神武天皇と比賣多多良伊須須氣余理比賣との間には日子八井命(ひこやいのみこと)、神八井耳命(かむやいのみこと)、神沼河耳命(かむななかわみのみこと)の三男児が生まれた。このうち神沼河耳命が建沼河耳命(たけぬなかわみのみこと)と名を変え第二代の綏靖(すいせい)天皇となるのであるが、本来は神八井耳命に皇位継承権があった。一方、神武天皇が九州で結婚した阿比良比賣の生んだ多藝志美美命も皇位を狙っていたから神武天皇の死後に確執があり建沼河耳命の活躍で異母弟組が勝つて殊勲者が即位した。この相継争いのことは第一章に述べている。

初代の天皇にしては内容が簡単過ぎるけれども神武天皇に関する古事記の記録は神沼河耳命と多藝志美美命の争いで終わっている。実在が否定されるのもその所為であろうか：どうせ虚構の物語ならば、最初に述べたメデアア国王女の話のように寝小便で洪水が起きるような途方も無い内容ならば、聞くほうが安心出来るかもしれない。

此の場合、多藝志美美命は神武天皇の死後に継母となる比賣多多良伊須氣余理比賣を妻としていたから皇位を狙う気にもなったのである。古事記には、その為に神八井耳命ら三人の異母弟を抹殺しようとした、と書いてある。さらに表題が「多藝志美美命の変」となっているから、現代感覚で言えば多藝志美美命が悪人のイメージで見られてしまうし、第一章でもそのように書いたけれども古代には義理の母との結婚が珍しいことでは無かったと言われる。皇位継承の争いに敗れて悪人にされたことも考えられる。

異母兄を討つことのために神八井耳命を押し退けて多藝志美美命を討ち、第二代の綏靖天皇となったのは神沼河耳命である。神八井耳命は臣下として天皇を支えることとなり、その子孫は主要な国に広がった。古事記を編集した太安萬侶も其の一人だと言っている。第二代の綏靖天皇について古事記の記事は極めて短い。本来は皇位を継ぐべき立場にあった自分の祖先の神八井耳命が綏靖天皇に譲ったから、その未練で太安萬侶が短くしたのであるか。日本書紀には皇后として叔母の五十鈴依姫（いすずよりひめ）を立てたとしており古事記とは異なる。俗説では此の天皇が朝夕に生きた人間を七人ずつ喰ったので、何時喰われるか分からない家来たちが騙して岩屋に幽閉したことに

なっている。人喰いにしても一食に七人は喰い過ぎである。そのため架空の天皇説が強い。

尤も第十代の崇神（すじん）天皇の以前になる八代は実在が疑われているようで、古事記の記録には物語が無く戸籍謄本のような記事だけであるから架空と言われても仕方が無い。興味深いのは崇神天皇であり、此処では神武天皇の皇后とされた比賣多多良伊須氣余理比賣の出生にまつわる話の原型となるような、現代では理解できないような物語が繰り返されるのである。

近代の説で初代の日本国王として実在性が高い人物とみられている崇神天皇は、御真木入日子印恵命（みまきいりひこいにえのみこと）と言う。古事記に従えば、父は開化天皇で母は伊迦賀色許賣（いかがしこめ）という女性であるが、この人は開化天皇の前の孝元天皇の第二夫人であった。物部氏一族のようであり、開化天皇の皇后に立てられている。近畿地方に進出して来た大陸系の集団は、有力な部族との縁組を進めて、それら豪族たちの協力で徐々に勢力を広げてゆくのである。その先覚者である崇神天皇は水垣の宮（奈良県桜井市付近）に居たとされる。この頃には王朝も近畿地方一帯に勢力を広げたようで、最初の奥さんが和歌山の女性であり、豊木入日子命（とよきいりひこのみこと）と、豊鉏入日賣命（とよすきいりひめのみこと）の二人を生んだ。

豊木入日子命は第一男子であるから皇位を継ぐ立場に在ったのだが実家の豪族の力関係から東国遠征に就かされ茨城、栃木方面に定着した。石岡市八郷地区にもその足跡が在るらしい。石岡市村上地区に在った？（現在は山自体が消滅している…）という「龍神山」に伝えられた「蛇神伝説」は此の人

の遠征に伴って齎されたものと、勝手に推測している。但し先に述べたように、此の神話及び該当する場所は水戸市が大切にしているから一般には水戸の伝説と思われている。

豊鉏入日賣命は同母妹である豊伊勢神宮の元祖のような仕事をしていた。祭祀される場所が無かった御神体（八咫鏡）を守って各地を転々とした初代の巫女（みこ）さんである。苦勞続きの上に、或る日、高齢を理由に若い巫女に交代させられた。（失礼な話だが）失業保険のことは分からぬ。やがて壬申の乱で天武天皇に味方をした伊勢氏の力が強くなると伊勢神宮が創建されて御神鏡は其処に祀られることになる。

この天皇時代（実際には限られた地域の大主であったと思う）の記事で最も重要なのは近畿地方から東海道などに將軍を派遣したことと、日本最古の古墳と考えられている「箸墓古墳」との関わりであり、蛇神伝説の発信地とも言える三輪山の神（大物主神）が物語に登場することである。この神様の原型と言うか神武天皇妃（比賣多多良伊須氣余理比賣）の父親に当るのが流れ者（たぬ）の神様になるのである。幾ら神様でも時代が何代も飛んでいるようなもので、神武天皇の実在が否定される意見もこういう物語の矛盾から出てくるのであろう。それはそれとして、先ずは古事記に従って大物主神の活躍？を紹介すると崇神天皇の時代に病名は定かた無いが疫病が蔓延して多くの人民が死亡した。心を痛めた天皇が仮の神殿を建てて一心に祈っていると、夢かうつつか天皇の前に大物主神が現れて言った。「是から述べることは我が（神の）心である。良く聞け。意富多多泥古（おおたねこ）という者を呼び寄せて我（大物主神）を祀れば、神の祟りは収まり、

国も安らかになる……」独占禁止法に触れるような意地の悪い御神託であるが、無視する訳にはいかず、直ちに使いの者が各地に派遣されて手がかりは何も無い中で「意富多多泥古」を探した。

当時は市区町村の役所も無かったから、集落ごとにスピーカーで「おおたねこはいるか！」と怒鳴って回る他はない。搜索隊が二十数キロ西の方の中河内地方にある「陶(すさ)」に行つて訊ねると「意富多多泥古はあの男だ！」と教えられたので、理由も説明する間もどかしく、怪しい？男を捕まえて天皇の前に連れて来た。陶地方は、当時の最先端工業地帯であつたと思われる。エンジニアとして勤務中であつた意富多くんは、白昼堂々と誘拐され、天皇の前に座らされた。

念の為に天皇が「意富多多泥古はお前なのか、お前は誰の子であるか？」質問をした。いきなり連行して来て失礼な質問で有るが意富多多泥古は臆せずに答えた。「私は大物主の大神の子孫で意富多多泥古と言う者です。詳しく言えば大物主神が活玉依毘賣(いくたまよりびめ)との間に櫛御方命(くしみかたのみこと)を生み、その家系が飯肩巢見命(いしかたのみこと)を生み、その家系が飯肩巢見命(いしかたのみこと)から建甕槌命(たけみかづちのみこと)と続き私に至ります。つまり、私は建甕槌命の子です」とスラスラ申し立てた。澁みなく言われると嘘でも本当に聞こえるから崇神天皇は信用するしかないのだが実はこの辺が古事記のデータラメなところであり、建甕槌命は武勇の神様として天照大神の依頼を受けて雲の上から神武天皇の軍を援けているのであるから、どう考えても陶村の会社で働く兄ちゃんの父親である訳が無いのである。すぐバレル嘘はダメ。

その点、日本書紀の記述は説得性があり、崇神

天皇が浅茅原という所で「悪疫退散」の祈りを捧げていると神様が天皇の側にいた皇族の女性に乗り移つて「私の言う通りに祀れば世の中が平和になります……」と告げられた。天皇が「そのように言われるのはどちらの神様ですか？」と訊ねれば「私は大和国に鎮座する大物主神……」と答えた。

迷惑にも神様に乗移られた女性の名は倭迹迹日百襲姫命(やまとととひもそひめのみこと)である。天皇は、言われた通りにしたのだが一向に改善されない。努力が足りないと思つて更に精進齋をしたところ、天皇の夢に怪しげな神様が現れて「心配は要らん。私の言うことを良く聞きなさい。事情は言えないが、私の子に大田田根子(意富多多泥古)と言う者が居る。此の者に私を祀らせれば良い……」と言つた。本当はその辺の事情を知りたいのだが夢の中では時間の制約もあるので我慢して眼が覚めた。

同じ頃に何人かの家来も同じ夢を見た、というので(上司に仕えるのは気苦労だが)早速に大田田根子を探し出して連れて来た。挨拶する間も無く、天皇に「お前は誰の子か？」と聞かれたので大田田根子はズバリ「私の母は陶津耳命の娘である活玉依姫ですが、父親は大物主神と言われています」と答えた。何の証拠も無く疑問点も多いが、緊急事態であるから詳しくは調べずに大田田根子が神職に任命された。急ごしらえで神社が建立されて大物主神と大国主命とが祀られることになり(この二神は同一とする説もあるが……)徐々に疫病も終息したのである。

疫病が収まったのは伝染病の流行が一段落したからであろうけれども、この話から推測されるところは大田田根子が居た「陶(すさ)」には帰化人

系の技術集団が居て当時としては画期的な方法で例えば高熱の還元炎を利用した陶器とか、高度な鉄鋼製品を製造していた……建甕槌命と言う人物は、その集団のリーダーであり、大和朝廷が侵略する前に山陰地方から進出して近畿地方にいた出雲系と推定している。言わば縄文人が自然を大切に暮らしていた地方に現代の原子力利用の様な技術を持ちこんだ集団の長であろう。善意に解釈すれば疫病を鎮静化させる医療技術らしきものを持つていたかも知れない。九州から侵略して来た新興勢力は建甕槌命を上手く抱き込んで新技術を学び、後に大和朝廷として権力を振るうことになる……と勝手に推測しているのだが……これは嘘にして貰いたくないと思つている。

崇神天皇らが夢に見てくれたお蔭で時代のヒーローとなった大田田根子は、古事記に依れば大物主命の子孫である建甕槌命の子になっており、日本書紀では大物主命の子にされている。そして母親又は曾祖母として活玉依姫の名が挙げられる。活玉依姫は陶津耳命(すえつみのみこと)の娘という設定である。陶津耳命は多分、建甕槌命が率いる集団の幹部なのであろう。古事記と日本書紀とで「適当な嘘」を書きまくつた為に、物語が複雑になって話の本筋が見え難くなつているのでここでもう一度「神の子」を整理してみる。

先ず神武天皇に遡り、初代の皇后となつた女性は比賣多多良伊須余理比賣である。この女性は三嶋溝咋という土木建築請負業の親父の娘・勢夜陀多良比賣という美人と、赤い矢に化けてトイレから侵入して来た(もう少しマシな場所から来たら良いと思うが……)神様との間に生まれた。その神は三輪の大物主の神であつた。

次に崇神天皇の時代に疫病が流行して多くの人民が死亡し、折角、創った国家らしき集落が全滅状態になった。悩む天皇に神様のお告げがあり、最初に倭迹迹日百襲姫命が神憑り状態になった。次いで三輪山の大神主神の子という触れ込みで大田田根子が登場して来て神殿を設け祭祀を行ったところ悪疫は収まった。この大田田根子は自分の出生について母親は活玉依姫（又は活玉依姫の血縁者だと言ひ活玉依姫の許に通つて来た美男子を父として生まれたと言ひ）。その男性の素性が知れなかつたので両親が一計を案じ、部屋の入には赤土を撒き、デートの最中に相手の着衣の裾に糸を通した針を付けて置くように指示する。

明け方近く、男性が帰って行った。見ると入口の扉のカギ穴に糸が通っている。（古代の住居にカギ穴が在ったかどうか疑問だが…）糸を手繰って行くと三輪山の頂上に達し、粗末ながら建立されていた神社で止まつていた。それにより謎の男性の正体は三輪山に祀られた大神主神であることが分かつた。活玉依姫の家から三輪山の頂上まではかなりの距離があつたため、活玉依姫の家で用意した糸（謎の男性に付けた糸）は殆ど伸び切つていて、家の中には僅かに輪の状態で三巻だけが残る状態であつた。そこで、其れまでは大神主を祀る神の山とされていた場所が「三輪山」と呼ばれるようになった。（神様にしては単純！）（続く）

【風の談話室】

時の移ろいが早へ思ふなるやうなる年をこつてきた証拠たひはよへ言ひおれぬやうである。

今年も早終わりがかと思つてしまつのは、よくよく歳を重ねて来たといふ事なのだろうか。この会報も、来年はいよいよ100号を迎えることになる。100号の記念イベントでも考えなくては思つているが、さてどうなる事か。

《一寸一言・もう一言》

初詣はどこへ行く？

菅原茂美

いよいよ年末。明けたら初詣は、どこへ行こうか？例年通り、いつもの所でもいいじゃないの。これが普通だと思つていたら、実はそういうものではないらしい。

日本の習慣に関する古い本を調べてみたら、本来の初詣は、「恵方参り（えほうまいり）」といい、その年の最も「めでたい方角」の社寺に参拝するのが本筋との事。

「恵方」とは、その年の正月に、歳徳神（としとくじん）が来臨される方角の事で、恵みの神様がいない社寺に参拝しても、仕方ないではないか…と書いてある。

では、来年は、どの方角に恵みの神様がおわしますのか？

具体的には、自分の住む家から見て、甲（きのえ）、己（つちのえ）の年には東北東。丙（ひのえ）、辛（かのえ）、戌（つちのえ）、癸（みずのえ）の年が南南東。庚（かのえ）、乙（きののえ）の年が西南西。壬（みずのえ）、丁（ひのえ）の年が北北西なのだそう、ちなみに平成26年は、「甲」なので、参拝する社寺は東北東の方角と言う事になる。もし、その方角に思い当たる社寺がなければ、どこぞ思い当たる社寺の

近くまで行き、自分は社の西南西の方角に立ち、そこを自宅とみなし、その立地点から歩を進めれば理にかなつた恵方参拝となる…との事。私は科学バカで、こんな迷信みたいな事は全く無関心であつたが、日本の長い歴史が育んだ文化なので敬意を表し紹介する。

過ぎたるは…

打田昇三

研究熱心の余り、テーマに没頭すると思ひ付いたことをメモにして机の周りに貼りまわし遂には部下の机まで占領する上司が居た。共存社会では相手に対して配慮しないと迷惑が掛かるか、目的が達せられないことも起きる。

紀元前七、八百年頃に中央アジア、西アジアからトルコ、エジプト辺りまで支配したアケメネス王朝。ペルシア帝国の初代ダレイオス（ダリウス）大王は、イラン北西部のイラク国境に近い街道沿いに自分の功績を称える記念碑を残した。当時の強大国を倒して無名のペルシアを世界初の帝国にしたのであるから後の世に自慢をしたい気持ちには分かるが、記念碑を残した場所が良くない。

街道（シルクロード）沿いではあるが地上七〇メートルの断崖絶壁（岩）に彫らせたので、諸民族に知らせようと当時の四か国の文字を使つていながら現場を登れる者は居なくて二千五百年以上も読まれることが無かつた。西暦千八百年代に英国人のローリンソンが命懸けで現場に到達し、古代ペルシア語など四種類の文字で書かれた大王の自慢をやつと解読してくれた。そのお蔭でペルシア帝国初期の歴史が解明されたのである。

破壊される心配から絶壁を選んだらしいのだが誰にも読まれなくては「子供の落書き」に劣る。

《ことば座だより》

東京公演を振り返って

小林幸枝

東京公演が終わり、あつという間に一月が過ぎました。今ようやく東京公演の事を振り返り、次に私がやっていかなければならないことが考えられるようになってきました。

東京公演では、私はただただ平将門に成り切ることを考えて、舞を作っていました。それは何とか形になったように思っています。

大勢の聾者の友人たちが応援に来てくれましたが、手話の舞は朗読の通訳ではなかったよと褒めて頂き、大変うれしく思っています。

東京公演を振り返って見たとき、私にとって一番の勉強になったのは、ヨネヤママコさんの演出図に対する取り組み方でした。私はこれまで演出テーマだとか演出意図と言われても、それに向かってどのように自分の舞を創っていったらいいのか良く判りませんでした。

そんな事を言うと白井先生に叱られるかもしれませんが、演出の仕事というのもよく理解していません。柏木さんの舞を見ても先生の言う演出意図を舞に作っていることが見えませんでした。でも、東京公演でのマコさんの表現の取り組み方は私の知っているものとは全く違いました。

演出の要求に対して正面から向き合って、道化

のマイムダンスを創造されました。マコさんの演技作りを見て恥ずかしい話し、舞台とは演出図に向かって作り上げていくのだという事を知りました。

来年は、新しい形での舞台作りになるからと言われており、白井先生以外の人の朗読で舞を舞う事になるといわれています。マコさんに見せて頂いた自分の演技表現の作り方を見習って、ますます頑張っていきたいと思っています。

来年もよろしく応援お願いいたします。

日本の美は型破りにあり

白井啓治

日本の伝統文化における芸術性は様式美にあるといわれる。確かに、そう表現されても不思議はない所がある。一見、決められた様式、型を忠実に守る中に芸術としての美があるかのごとくに思える。

しかし、実際には日本の芸術美は様式の中には無い。日本の伝統文化としての芸術美は、様式美ではなく、一つの様式として作られた型を破るところに独特の美があると云っていいだろう。

日本の文化を見ると全ての分野に型が存在する。能にしろ歌舞伎にしろ、音楽にしろ絵画にしろみな決められた型がある。武道にも、茶道にも、華道にも、詩歌にも決められた型がある。そして、その型を守る事で美が創りだされると信じて疑わないところがある。

しかし、日本的な美とは、その型にあるのではなく、型を破るところに存在するのである。型とはあくまでもその道に入りやすくするための基本

所作といえる。

日本の芸能文化の世界を見ると、宗家、本家が掃いて捨てるほどある。そしてそこにはピラミッド型の利権構造が構築されている。利権構造の中には美は決して存在しない。其処に咲く花があるとすればそれは腐乱花である。悪臭のたち上る美とは遠くかけ離れたものと言える。

一つの表現を確立した者は、その後人達に自分の確立した表現を踏み越えて、さらなる新しい物を構築してくれることを望むものである。それを望まぬのであれば、弟子たちをとる事はしない。弟子というのは自分を踏み越えて更なる完成度の高い表現を創造してもらいたいと願うから受け入れるのである。

弟子達には、自分を越えた表現を構築してもらいたいと願う事から、自分の確立した表現の一つの型、基本形として構築し、其処までに至る遠回りの試行錯誤を取り除いてやろうとするものが、所謂『型』というものである。

その事から考えると、型とはそれを守るためのものではなく、その型を破り新たな表現を創造するための踏み台という事になる。そして、それが型の持つ本来の意味だと言える。

しかし、表現者を志したからと言って全員が表現者になる事はあり得ない。表現者となれるものはほんの一握り、いや一握りにも満たない人達だけである。大半以上の者が才能の壁に立ちまはだかれて表現者であることをあきらめていくのである。

これは非常にうがった見方、考え方ではあるが、自分の才能に見切りをつけた者が、他の道に進むことが叶わぬことから、型に権威付けをして、それで飯を食う事を考え付いたのではないだろうか。

それで宗家、本家なるピラミッド型の利権構造を構築し、本来創出した型の意義をはなれ、新たな『型』という商品を作り上げてしまった。

と、こう断言したら日本中の宗家・本家から大いなるクレームを貰う事になるかも知れない。しかし、これが単なるうがった見方だけでは済まされないような側面のある事も事実である。

さて、小生は、脚本家であり演出家を名乗っており、かつてはこれで飯を食い家族を養ってきた。そんな小生が日本的「型」をテーマに思いを巡らせたとき、脚本とはある意味「型」という事が出来、演出とはその型を破る方向を示すもの、という事が出来る。

演出とはどんなことをするので、と質問されて返答に窮することがある。蜷川さんの灰皿投げが有名になって、灰皿を投げるのが仕事だと勘違いしている人もいる程である。それぐらい、演出の仕事は何だか分かって貰えていない。俳優さんの中にも、演出の役割をよく認識して居られない方がいるのだから笑ってばかりはいられない。冗談にはあるが、演出とは灰皿を投げるのがその仕事です、と答えた事があったが、今度からは型破りをさせることが演出の仕事です、と答えてみよう。

如何に完成された美事な型であったとしても、それを寸部も違わず真似てみせても、芸術美にはならない。ただの古臭い表現とみなされてしまう。一つの型を演じてそれが美事な表現として人の目に映ったとしたら、そこには必ず型破りという斬新がある。

美は、型という名の様式にあるのではなく、型破りをすると言う演者の心の中にあると言えぬ。

芸術表現の世界だけではなく、どの世界にあっても掟破り、型破りのない世界はつまらないといえる。但し、姑息な後出しジャンケンの掟破り、型破りは許されるものではない。

2013年も無事終った。

来年はこの会報も100号を迎える事になる。

大袈裟なことは何もできなかったが、良く続いて来たと思つ。なかなか新しい会員が集まらないが、1号からのメンバーが、欠けることなくやって来られたのだからこれ程嬉しい事はない。

ふる里の歴史文化の再発見と創造を考えると大袈裟すぎるテーマを掲げてはいるが、それほど大袈裟なものではない。一寸一言の眩きに過ぎない。

止めたらそれで唯のお終いなので、無理せずもう少し、来年も頑張つて行こうと話している。1月号は11日発行となります。

《ふる里》

アランシ書房・書房会席料理のお店です。

(キター文化館通り)

看板娘(大)「つづら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

080-909-430000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡133979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ことば座「朗読教室」受講生募集中!!

朗読は演劇です。このことを忘れて、スラスラよどみなく標準語で読むものだと思っていないませんか。

朗読は、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることです。

物語とは、はじめに言葉があって紡がれたのではなく、はじめに作者の心があって言葉に紡がれたものです。

物語(詩)を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)そのドラマ(物語)を演じる必要があります。

ことば座では、ふる里「常世の国の物語」を、朗読表現する俳優の育成を考えています。

月二回程度の授業を考えております。(受講料月額 3,000 円)

ことば座の脚本・演出家:白井啓治が丁寧に指導します。

朗読表現に興味をお持ちの方連絡をお待ちしております。

連絡先 080-3125-1307(白井)